

## 自己評価報告書

平成23年 5月11日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20330133

研究課題名(和文)

認知と言語コミュニケーションの相互関連性に関する社会心理学的研究

研究課題名(英文)

研究代表者

唐沢 穰(KARASAWA MINORU)

名古屋大学・環境学研究科・教授

研究者番号：90261031

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会的認知、コミュニケーション、認知バイアス、語用論、原因帰属、文化

## 1. 研究計画の概要

言語コミュニケーションによって、意図の伝達や対人関係の調節が行われる過程を、言語学的理解に基づいた上で計画された心理学的な実験研究を主とする実証的研究によって明らかにすることを目的とした。社会心理学的な観点からは、言語表現に用いられる述語の特質(たとえば動詞の他動性)が、原因の推論や責任追及の過程と関連すること、そしてこれが伝達するという目標によって影響を受けることを実験により確かめた。文化心理学的観点からは、対人葛藤の解決に用いられる言語表現と文化的特徴との関連が検討された。発達心理学的アプローチでは、心の理論の形成過程と助詞等の使用との関連が吟味された。

## 2. 研究の進捗状況

上に記した各プロジェクトはそれぞれ、当初の目標を上回る進捗を示した。

(1) 社会心理学研究では、人物と行動の記述における動詞の自動・他動性と、行為者の責任や行動の評価との間に見られる系統的な関係を明らかにした。また、日仏比較研究により、文化間の差異性と共通性のそれぞれについて実証的知見を得た。

(2) また、他者に情報を伝達するという意図があることによって、原因の推論におけるバイアスが影響を受けることを実験によって明らかにした。

(3) 文化心理学研究では、上記に加えて、幸福感の心理的基礎とその言語表現に影響をもたらす文化的基盤の特徴を実験によって明らかにした。

(4) 言語発達研究では、「心の理論」の形成にコミュニケーション能力が深く関与す

ることを明らかにし、特に3歳前後の時期に見られる特徴ある発達過程について重要な知見を得た。

(5) 皮肉・アイロニーの成立過程を心理学実験によって明らかにし、言語使用と社会的関係との相互関連性に関する知識を格段に進歩させた。

(6) 以上の個別領域の知見を統合することにより、領域横断的アプローチの成果と問題点についての議論を深めた。その成果は日本心理学会でのワークショップ開催として結実した。また、政治的信念の維持機能としてのコミュニケーションの役割を議論するために、海外からの演者を招いて講演会を開催するなど、言語研究以外の分野との学際的交流にも力を入れた。

## 3. 現在までの達成度

各プロジェクトとも、当初の計画以上の成果があったと言える。その理由は、研究実施を通して、さらに幅広い研究分野との協働や研究交流、そして新しい研究テーマの創出を行うに至っているからである。よい意味で新たな課題が示され、それに取り組むため、次項に述べる新規研究プロジェクトもすでに計画されている。

## 4. 今後の研究の推進方策

本研究の実施を通して得られた新たな研究課題のさらなる追求と、領域横断的協働の一層の進展を目指して前年度申請を行ったところ採択された。これによりさらに3年間の研究を行い、より精緻な議論と重層の実証データの蓄積に努める。また国際的なオーディエンスも含めて広く成果を公表するための出版活動などを目指す。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13 件)

1、寺前 桜・唐沢 穰(2008) 集団の行為に対する意図性認知—自由記述による説明内容の分析 人間環境学研究 6, 35-41. 査読あり

2、菅さやか・唐沢 穰・服部陽介 (2009) 情報伝達という目標が社会的事象の原因説明に及ぼす影響 社会心理学研究, 25, 21-29 査読あり

3、Tsukamoto, S., Gonzales, V., & Karasawa, M. (2010). Challenging Canadian multiculturalism: Lay perceptions of Canadian national identity. *Journal of Human Environmental Studies*, 8(1), 25-31. 査読あり

4、Matsui, T., Rakoczy, H., Miura, Y., & Tomasello, M. (2009) Understanding of speaker certainty and false-belief reasoning: A comparison of Japanese and German preschoolers. *Developmental Science*, 12, 602-613 査読あり

5、Senju, A., Southgate, V., Miura, Y., Matsui, T., et al. (2010). Absence of spontaneous action anticipation by false belief attribution in children with autism spectrum disorder. *Development and Psychopathology*, 22, 353-360. 査読あり

[学会発表] (計 29 件)

1、Karasawa, M. (2010). Perception of responsibility and the use of language: Implications from a Japan-France comparison. Invited symposium presentation at the 1st International Conference on Indigenous and Cultural Psychology. University of Gadjah Mada, Yogyakarta, Indonesia. (July 25, 2010)

2、Karasawa, M. (2009). Transmission of stereotype-relevant information in communicative contexts. Invited symposium presentation at the 32nd Annual Scientific Meeting of International Society of

Political Psychology, Dublin, Ireland (July 14, 2009).

3、Karasawa, M. (2008). A linguistic analysis of dispositional inferences and causal attributions. Symposium presentation at the 14th International Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Bremen, Germany (July 28, 2008).

4、岡本真一郎 (2009) 皮肉伝達における透明性の錯覚—表現の不誠実性の効果— 日本社会心理学会 50 回大会, 大阪大学 (10 月 11 日)

5、松井智子 心の理解とコミュニケーション: 認知語用論と発達心理学 (2010) 日本心理学会第 75 回大会 大阪大学 (9 月 20 日)

[図書] (計 7 件)

1、Karasawa, M., & Maass, A. (2008). The role of language in the perception of persons and groups. R. Sorrentino and S. Yamaguchi (Eds), *Handbook of Motivation and Cognition across Cultures* (pp. 317-342). San Diego, CA: Academic Press.

2、唐沢 穰 (2010) 認知の社会的共有とコミュニケーション 日本認知心理学会 (監修)・村田光二 (編)『現代の認知心理学6 社会と感情』(分担執筆 248~271 頁) 北大路書房

3、岡本真一郎 (2010) ことばの社会心理学 (第 4 版) ナカニシヤ出版

4、Fitneva, S. & Matsui, T. (eds.) (2009). Evidentiality: A Window into Language and Cognitive Development, New Directions for Child and Adolescent Development. Jossey-Bass

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]